

第14回 舞台は銀座から新宿に 若い恋人から「大人」の歌に

昭和41年秋、『二人の銀座』を大ヒットさせた山内賢と和泉雅子の青春スターコンビは、翌42年3月、和泉の実弟、寿時（ひきとき）の作詞作曲による『星空の二人』を発表します（GSのジャガーズのものとは同名異曲）。

女性コーラスをとり入れて甘酸っぱい歌謡ポップスに仕上げている川口真の編曲が素敵ですし、聞いているほうが照れてしまうような間奏の台詞も聴きどころです。

続いて5月に『二人の朝』（詞・永六輔、曲・宮川泰）を発表した後、デュエットでの最終作品となる『東京ナイト』（曲・ベンチャーズ）を9月にリリースします。

作詞の永六輔が東京観光しながらに「モノレール、エアポート、東京タワー、高速道路」といった名所を「銀座、新宿、赤坂」の盛り場と交錯させて「東京の夜」を仮想ランデブーさせてくれます。

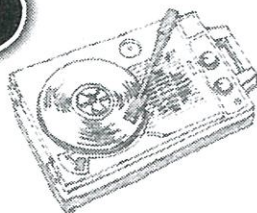
この『東京ナイト』と同時期にミノルフォン・レコードから一枚のデ

ュエットソングが発売されています。大木英夫と津山洋子の『新宿そだち』です（作詞の別所透は、津山の叔父）。

名曲カルテ

昭和歌謡と いつまでも

堀井六郎
絵・松本浦



同じ東京の盛り場をテーマにした昭和歌謡でも、対照的なこの2曲は、歌謡ポップスと演歌、ベンチャーズ対遠藤実という当時の業界の動向を示してくれています。

津山洋子は、昭和39年に山内・和泉と同じ東芝レコードからデビューしますが、ヒットに恵まれず、ほどなく遠藤実が設立した新レーベルのミノルフォン・レコードに移ります。そこで、『五百八羽の千羽鶴』に続き、樺太や出身地の東北をテーマにした歌を歌い続けますが、やはりヒットには結びつきません。

おそらく、その頃のことだと思えます。愛読していた『中2コース』に刑務所などを慰問する若い女性歌

手の記事が掲載され、正義感に燃えていたニキビ面の中学生は、しっかりとした和服姿のお姉さんのファンになりましたが、残念ながら、その後、その女性歌手のことをテレビやラジオで見聞きすることはありませんでした。

そんなある日、突然、大木英夫という見覚えのない男性歌手と楽しそうに「大人の歌」をデュエットしている女性が、あの記事の主人公だった津山洋子だということを知り、複雑な気持ちになります。

慰問の刻苦精励ムードとはギャップのある水商売ソングを歌う津山は雑誌の記憶よりずっと大人びた女性のように見えたが、実はまだ21歳、和泉雅子より1歳半ほど年長なだけでしたし、大木にしても山内賢と同年生まれの若者でした。

『新宿そだち』発売から半世紀、演歌歌手の高樹一郎と結婚し古稀を超えた津山ですが、現在も夫妻で被災地などを慰問しているそうです。ちなみに、「女なんて」「男なんて」のあとに「サ」を入れたのは、作詞もこなす遠藤実のアイディアだったと言われています。

